

当報告の内容は著者の著作物です。

第4回（通算第10回）

基幹研究「人類学におけるミクロ - マクロ系の連関」公開セミナー

平成23年11月26日（土）13:00-18:00 AA研306号室

タイ南部国境地域のマレー系ムスリムコミュニティにみる
越境、ジェンダー、およびアイデンティティ

常田道子(AA研 ジュニア・フェロー)

<要旨>

本発表は、タイ南部国境地域のマレー・ムスリム・コミュニティにみられる国境を越えた活動とジェンダーおよびアイデンティティのつながりを、特に労働移動と結婚のパターンの変化に焦点をあてて考察するものである。

過去のマレーシアへの労働移動のパターンは主に男性による農業季節労働であったが、近年の労働移動は、女性、特に若い未婚の女性をも含むものとなり、農業から工業、そしてサービス業へと移行し、マレーシア側で働く期間も中期・長期へと変化した。

マレーシアで非合法的労働者として働くなかで、男性は自分たちにとっては「タイ＝自分達の土地/ウチ/故郷」のほうが「マレーシア＝マレーシアの人の土地」よりもいいと強調する傾向があるのに対して、若い女性は南タイではできない経験や「モダン」なライフスタイルに触れることや、マレーシアの男性との結婚の機会などに新たな可能性を見出している。一方、タイに子供を残してマレーシアで働く女性たちのあいだには国境を越えた遠距離育児の難しさもみられ、既婚女性の経験は若い未婚の女性の経験とは一線を画す複雑さもあるといえる。

タイ南部国境地域のマレー・ムスリム・コミュニティでは、かつては男性も女性もマレーシア側のマレー・ムスリムと結婚する機会があったが、近年ではタイ側の男性がマレーシア側の女性と結婚することは非常に稀になっている。こうした結婚パターンの変化は、移民法のジェンダーバイアス、マレーシアの女性が外国人と結婚することをタブー視するジェンダー概念にかたちづくられた反移民的言論、マレーシアでみられるタイの女性に対する「従順」「やさしい」などというイメージなどに影響を受けているといえる。そして、こうした結婚のパターンの変化は、近年国境を越えたネットワークづくりにおける女性の役割を拡大させてきたともいえる。マレーシアのマレー・ムスリムとの結婚生活の実情には難しさや矛盾もあるが、国境を越えた繋がりの要であることが南タイ出身のマレー・ムスリム女性の社会資本であることから、そうした女性にとっても国境は重要であるといえる。

こうしたジェンダーによって相違する越境のかたちは、国境と越境を語るうえで、全体

的な移動の増加や減少を見るよりも、ジェンダー、世代、階級、パーソナル・コネクションのありかたなどによってかたちづくられる動きのありかたや、そうしたあり方の形成や変化の過程を考察していくことの重要性を示唆する。

タイ国内では宗教的にもエスニシティのうえでもマイノリティであるマレー・ムスリムにとって、タイ仏教徒との相違はアイデンティティの指標となっている。しかし、労働移動のパターンの変化と、マレーシアの国境と移民のコントロールの厳重化および反移民的な社会的言説のひろがり、南タイのマレー・ムスリムのあいだで「タイの人」であるという意識を高め、物理的および社会的現実として存在する「国境」が、アイデンティティの構成とパフォーマンスにおいても重要化してきたことが指摘できる。

特に、近年南タイからマレーシアに向かうマレー・ムスリム労働者の雇用先として顕著であるタイ・レストランでの調査は、タイ言語、タイ料理や、音楽、雑誌、テレビ番組などのタイ・メディアが、南タイのマレー・ムスリムの人々が国境という境界線を理解し、また作り上げていく上で重要な役割を担っていることを示している。また、サービス業に関する研究が指摘するように、労働者とクライアントとの関わりが労働の中心となるサービス業では、両者の間の既存のヒエラルキーの再生産や新たな境界線の形成がみられるものである。タイ・レストランへの就業の増加も、タイ南部国境地域のマレー・ムスリムのあいだにみられるマレーシアのマレー・ムスリムとの差異の感覚と、「タイの人」としてのアイデンティティの形成・実践・パフォーマンスを促してきたものであるとも考えられる。

国境は、タイ国境沿いのマレー・ムスリム・コミュニティの男性と女性（そしてトランスジェンダーな人々）の毎日の生活のあり方と、貧困と政治・社会的困難の中でのサバイバルのための方策に方向性をつけるものであり、彼らが自らの生活に影響を及ぼすローカル、ナショナル、トランスナショナルな力を理解していくうえで重要な標識として機能するものであるといえる。